

神戸福原における雪見御所(平清盛本邸推定地)についての考察

－風水思想からの分析－

An Examination of Yukimigoshō (Presumed Location of
Tairano Kiyomori's Residence) in Fukuhara, Kobe City

－ Analysis from the Viewpoint of Feng Shui Thought －

曾我とも子

Tomoko SOGA

I はじめに

1. 研究の目的と方法

福原は、12世紀末に平清盛の主導で造成された都である。その場所は現在の神戸市中央区から兵庫区・長田区・須磨区・北区の一部にまで及んでいたとみられ、当時の貿易港であった大輪田泊を見下ろす位置にあった。1180（治承4）年6月には京都平安京から安徳天皇らの行幸が行われたが、都造りは頓挫し、半年で平安京に還都した。しかも後に、福原の建造物は平家自らの手によって全て焼き払われた。このため、都市としての福原の姿を詳細に再現することは難しい。しかし1902（明治35）年の水道管敷設工事における発掘調査や1908（明治41）年の湊山小学校舎改築の際の発掘調査、また『玉葉』『吉記』『三槐記』¹⁾など当時の公家の日記等による文献から、清盛邸や平家の邸宅があったことが推定されている。

本研究の目的は、かつて福原に造営された主要な建造物のうち雪見の御所（平清盛邸推定地、以下、平清盛邸と称す）について、これまでも推定されているその位置を風水の考え方をもとに、特定することである。研究の方法としては、これまでの発掘調査書や文書資料の読解・分析とともに、地形や地形図の検討をし、さらに筆者独自の方法として風水思想のうちの「陰陽・五行思想」に基づく分析を行った。

陰陽思想とは、世の中のあらゆる事象は、陰と陽の相反する2つの気の調和によって、この世の中の秩序が成り立つと考えるものである。また五行思想とは、すべてのものは、木・火・土・金・水の5元素から構成されているという考えである。

平安時代は、風水思想のなかでも呪術的要素の強い陰陽五行思想が陰陽道として取り込まれた時代であり、それを司る陰陽師が活躍していた。平清盛邸に関しても風水の呪術が施されていたと考え、

1) 『玉葉』 平安時代末～鎌倉時代初に書かれた公家九条兼実の日記
『吉記』 平安時代末期に書かれた公家吉田経房の日記
『三槐記』 平安末期の公家藤原忠親の日記

陰陽五行思想に基づいた分析を行えば、雪御所の存在を明らかにできると考えた。

調査地としては、神戸市兵庫区の雪御所町を中心に、天王谷川と石井川流域、両河川が合流する湊川流域、上祇園町、夢野町、荒田町にかけての地域である（図1）。

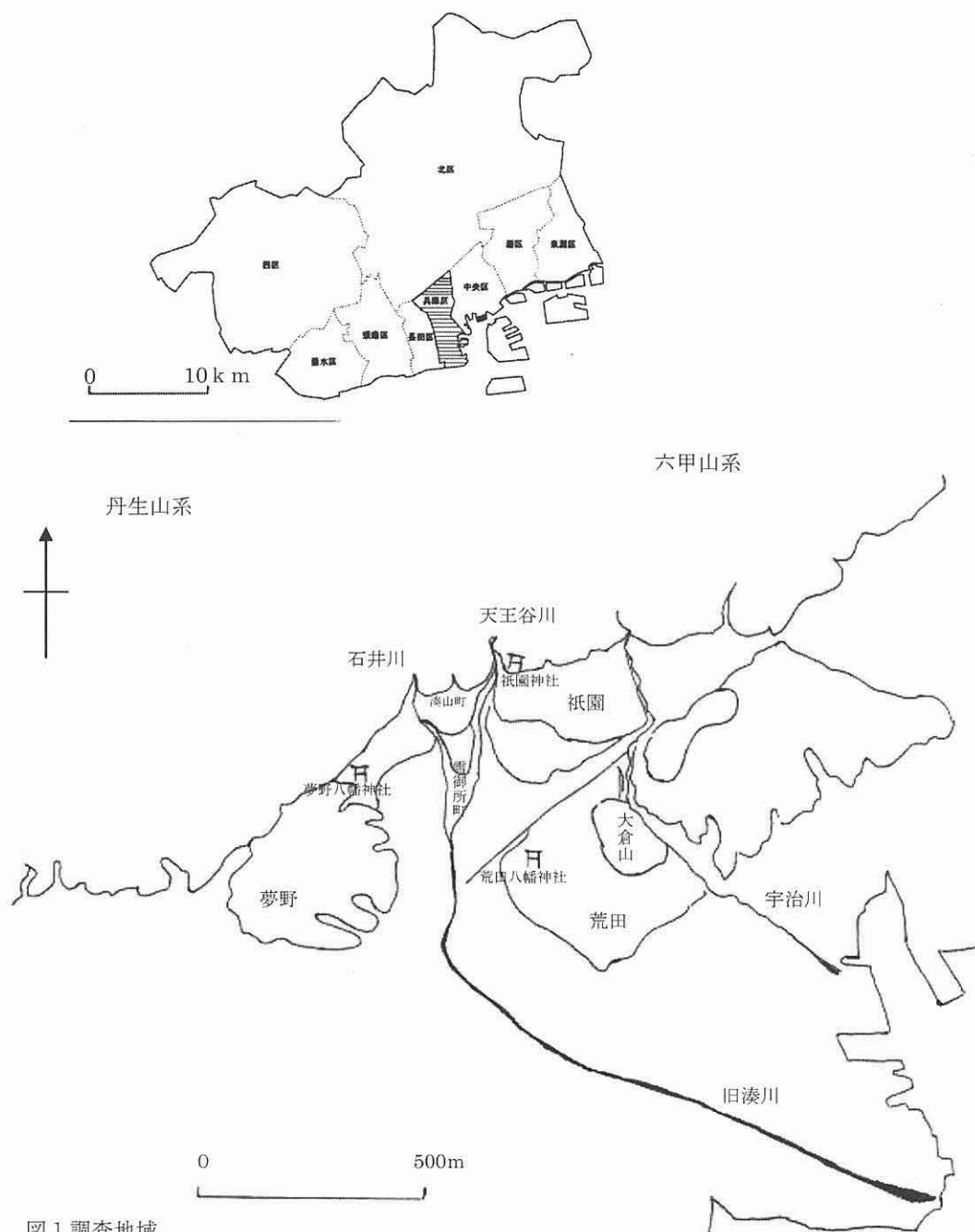


図1 調査地域
兵庫県神戸市兵庫区

2. 既往の研究と本研究の意義

高橋 (2007)²⁾は雪御所町周辺の地形が風水思想のうち「四神相応」の地であることを指摘している。また、平清盛邸に関するこれまでの発掘調査については、1902 (明治35) 年に天王川右岸の湊山町で石材列が発見され、その3年後には湊山小学校舎改築の際に多数の土器、瓦片、礎石が発見された。その後、1987 (昭和62) 年の湊山小学校の建て替えにともなう調査では、石垣やかかわらが多数出土した土坑などが確認されたが、清盛邸に関係する確実な遺構・遺物は確認されていない (神戸市教育委員会、1989)。雪御所町の地名をもつこの地は『平家物語』³⁾にみえる「雪見の御所」とみなされ、現在は雪御所遺跡と呼ばれている。『平家物語』には、「故入道相国の造り置き給ひし所々を見給ふに、春は花見の岡の御所、秋は月見の浜の御所、泉殿、松蔭殿、馬場殿、二階の棧敷殿、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども、五条大納言邦綱卿の承つて造進せられし里内裏、鶯の瓦、玉の石畳…」とあり、福原には、季節によって配された清盛の邸や平家の邸宅群があったとみられる。

さらに、当時の公家である藤原忠親の日記『山槐記』に「本皇居禅門家雪御所北也」 (治承4年11月22日条) とあることから、雪御所は禅門の邸宅と推定されている。禅門とは清盛のことである。さらに、1993 (平成5) 年と1994 (平成6) 年に発掘調査がされた祇園神社周辺の祇園遺跡⁴⁾では、平安時代末期の平氏貴族の邸宅と思われる一部や庭園跡などが確認されている。これらの遺跡は、『山槐記』にある「爰近年占撰州平野之勝地、爰遁世退老之幽居 (治承4年3月5日条)」「左兵衛頼□宿所給去禅門亭四五町 (治承3年6月22日条)」「以御車令渡湯屋給去禅門亭一町許 (治承3年6月22日条)」の史料からも見られるように、平野一帯の高台には清盛や弟頼盛の邸が既に存在していたと考えられており、湊山町の北方には現在でも有馬温泉と泉質を同じくする湊山温泉が現存している⁵⁾。

以上のように、これまでの発掘調査や史料では、清盛邸の推測が見られるものの、清盛本邸と断定できる確証は見出されていない。本研究では、歴史地理学の方法論として、新たに風水思想によって清盛邸の位置を考察することは、方法のオリジナルな点と、推定されている清盛邸の位置の特定に有力な根拠を与える点で意義あるものとする。

2) 『平清盛 福原の夢』高橋昌明 (2007) 講談社

3) 『平家物語』市古貞次 (校注・訳) 平清盛を中心とした平家一門の栄枯盛衰を描いた軍記物語。鎌倉時代の作品と言われている。

4) 祇園遺跡一兵庫区上祇園町

「庭園の池から酒宴に使ったかけらが何千枚と出土した。また中国より渡来した吉州窯系小椀や京都系の軒瓦などが出土している」『神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 (1989)

5) 現在の雪見御所町、湊山町周辺から北東1町ほどのところの天王川沿いに湊山温泉があり、有馬温泉と同じ泉質の温泉が湧き出ている。また雪見御町、湊山町から東南4～5町のところには、頼盛邸と推定される楠・荒田遺跡が発見されている。『福原京の時代』歴史資料ネットワーク (2005) 岩田書院

II 風水思想と陰陽・五行思想

1. 風水思想の原理

約4000年の昔、中国で生まれたとされる風水思想は、目には見えないが、人体に影響を及ぼすとされる気の作用を信じ、山脈・丘陵・水流などの地勢を観察して、さらに陰陽・五行や方位を考え合わせ、その最も吉相と見られる地を選ぶことにあるとされる。中国の長安城、朝鮮の開京、日本の天皇陵など、古来より、これによって都城・住居・墳墓の位置を決定し、造営にあたってきた。

『日本書紀』602（推古天皇10）年の条に、「冬十月。百濟僧觀勒來之。仍貢曆本及天文・地理書。并遁甲・方術之書也。」とあり、この地理書とあるのが風水において土地の選定を行う風水地理の書物であり、遁甲・方術書とは、星の動きを観察し、十干十二支や八卦を使い方位や吉凶を判断する方術として、おもに戦術として用いられた。

「風水とは風と水である。風水の思想は人間が好環境に生活して安寧を得るために考え出された適応術で、環境への適応策として良い気を浴び悪い気を防ぐ方法論を持っている。それが「蔵風得水」の法という。つまり良い風を蔵えて良い水を得る方法論で、古来これを「風水」と略称した。生き物にとって水のない土地では生きていくことができない。水を得ることによって生氣が得られる。そして、生氣は風や水によって運ばれる。よって、風水にとって風と水は重要である。水は高地から低地に流れ、弧を描くようにゆるやかに流れる川がよく、勢いの強くなる真っ直ぐな川は殺気と呼ばれ洪水になりかねない。さらに、風を留めておくための土地が必要である。その土地とは山に囲まれた盆地状の地形をいう。風に吹きさらされる場所は、生氣が散ってしまいよくない。背後や左右に強風を防ぐ小高い丘陵があり、そして前方には、気を溜めこみ人間の生存にも不可欠な水があればよいとされる。そしてさらに、八卦・干支・星宿などにより気の動きを判断し方位を定める。したがって、風水説において吉地選定の基本的観点となるものは、一に山、二に水、三に方位の三者である。」⁶⁾

風水では、気の溜まる地、気の吹き出る地である「穴」を見つけることが重要としている。その場所を見つけ、気の吹き出る場所に、宅地や墓を造ることによって子孫が繁栄すると考えられている。

崔（1997）⁷⁾は、風水思想の根幹を形成するものは「穴」であるとする。「穴」とは龍脈の中で陰陽が合局し、山水の精気が凝結している所をいう。穴を探す方法を「定穴法」という。

2. 陰陽・五行思想の原理

陰陽説とは、この世の中のあらゆる事象は陰（月）と陽（日・太陽）から成り立っているとする二元対立論の考えである。天（陽）があれば地（陰）があり、表（陽）があれば裏（陰）がある。男（陽）がいれば女（陰）がいる。「この陰陽二元が、時間・空間・性をはじめとするあらゆる事象に、それぞれ配当されている考えかたといえる」（吉野、2007）⁸⁾。五行説とは、自然界のあらゆるものは木・

6) 『風水気の景観地理学』渡邊欣雄（1994）人文書院

7) 『韓国の風水思想』崔 昌祚（金在浩、渋谷鎮明共訳）（1997）人文書院

8) 『吉野裕子全集 第3巻』「陰陽五行思想からみた日本の祭」吉野裕子（2007）人文書院

火・土・金・水の5元素から成り立っているという考えであり、その五行が循環することによって万物の生成がなされ、自然界が構成されるとする。五行の行とは働きのことである。天には五星（木・火・土・金・水）が運行し、地には五行（働き）がある。その五つの働きには、相生、相克、比和等がある。木は火を生み（木の摩擦で火がおこる）、火は土を生み（火が燃えてなくなると土になる）、土は金を生み（土は鉱物を生み出す）、金は水を生み（金属は表面に水滴ができる）⁹⁾、水は木を生むことである（水によって植物は成長する）。これを相生といい、循環を表している。

その反対に相克とは、水は火を克し（水をかければ火は消える）、火は金を克し（火によって金属は溶ける）、金は木を克し（斧によって木は切り倒される）、木は土を克し（木は土の養分を吸い取る）、土は水を克する（土によって水はせき止められる）というもので、相手に勝つ関係をいう。また、比和とは同じ「気」が重なると、ますます盛んになることを表し、火に火を注ぐと火の力が強くなり大火事になる。水に水が加わると水の力が強くなり洪水になるというもので、強くなりすぎるとマイナスの作用になることがある。

古代中国において、天における五星（木・火・土・金・水）のうち、最も注目された星は木星である。その木星の運行状況に合わせ、木星とは逆の運行をする架空の星を作り、天空の方角を12区分（30度ずつ）に分け、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支を当てた。十二支は、主に、方位、月、日、時間を表すときに使用されていた。

図2にみるように、「北方を示す亥・子・丑は、それぞれ旧暦の10、11、12月を示し、冬であり水気に属している。また東方を示す寅・卯・辰は、旧暦1、2、3月の春であり木気に属している。南方を示す巳・午・未は、旧暦4、5、6月の夏であり火気に属している。西方を示す申・酉・戌は、旧暦7、8、9月の秋であり金気に属している。さらに季節と季節の変わり目に置かれた水気の中の丑、木気の中の辰、火気の中の未、金気の中の戌は春夏秋冬のどの季節にも属さず、土気とされる。いわゆる、これが18日間の土用の日といわれるもので、次の季節への移り変わりを促す5つ目の季節である」（吉野、1978）¹⁰⁾。月についても陰陽説では、奇数は陽で兄（え）、偶数は陰で弟（と）とされるため、たとえば11月は奇数の陽となり、12月は偶数で陰、1月はまた陽と続く（表1）。

9) 『四柱推命は中国にあり』陳 見華 (1994) リーベル出版

「金生水」とは－「金属は表面に水滴ができる」という考えは日本へ導入されて後に考え出されたものと思われる。古代中国においては、以下の理由によって考えだされたと陳見華氏は述べている。「金生水の由来は、物を切るのは刀であり、刀は金で作った器物である。金は肅殺の器物であるので、気候は秋を表す。なぜなら、中国北方では、秋になると、農作物だけでなく、地上にある草木はすべて枯れ果ててしまう。この光景がちょうど刀で切りはらったような状態であることから、中国の古代人は「金」に例えた。「金」は方角においては、「西」を表し、中国の大河である黄河・揚子江・珠江が、何れも西から東へ流れ、東シナ海に注いでいくのを見て、この様子を「金生水」と形容した。」

10) 『陰陽五行思想からみた日本の祭 伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として』吉野裕子 (1978) 弘文堂



図2 十干十二支（旧暦）の方位
（吉野、1978）

表1 月を表す十二支

子月	旧暦11月	陽	水（みずのえ）
丑月	旧暦12月	陰	水（みずのと）・土（つちのと）土用
寅月	旧暦1月	陽	木（きのえ）
卯月	旧暦2月	陰	木（きのと）
辰月	旧暦3月	陽	木（きのえ）・土（つちのえ）土用
巳月	旧暦4月	陰	火（ひのと）
午月	旧暦5月	陽	火（ひのえ）
未月	旧暦6月	陰	火（ひのと）・土（つちのと）土用
申月	旧暦7月	陽	金（かのえ）
酉月	旧暦8月	陰	金（かのと）
戌月	旧暦9月	陽	金（かのえ）・土（つちのえ）土用
亥月	旧暦10月	陰	水（みずのと）

土用は立春・立夏・立秋・立冬の前に置かれる18（19）日間である。

陰陽・五行説は、古代中国において天文・地理・哲学・医学・自然科学などあらゆる学問の中心となり、政治、経済を動かす原動力となった。日本へは朝鮮半島の百済の僧より導入され、陰陽道として取り込まれ、神道や仏教にも融合し、広まっていった。日本では風水思想の中でも、とりわけ占いの要素の強い八卦や陰陽五行思想がしだいに普及し、広まっていった。とくに平安時代は占いによって人の行動を左右される時代となり、それをつかさどる陰陽師が活躍することとなった。この思想は、当初天皇家などの王族のみの特権であったものが、やがて貴族層に広まり、その後、一般民衆にまで拡大していったといわれる。

陰陽道を司る陰陽寮が、初めてできたのは、天武天皇の時代675（天武4）年とされる。またこの年に星を観察するための占星台も造られた。天皇や將軍の側近には、必ず陰陽道を司る陰陽師とよばれる人たちがつき、都市計画や政治の助言などをし、活躍した。

平安時代、陰陽寮は政府機関のうち中務省に属し、陰陽博士、暦博士、天文博士、漏刻博士と呼ばれる人たちがおり、国家的な事業を行っていた。平安中期に全盛を迎え、その後、貴族層や下級武士、さらには、一般民衆にまで広まった。陰陽博士は、土地の吉凶や、式盤を用いて日々の吉凶などの占

いを行う。暦博士は、季節や日の吉凶・陰陽道的禁忌を注記した暦の作成を行う。天文博士は日月、五星、二十八宿などの天文の観測を行い、異変を察すると、天文異変の状況とその内容を天皇に報告する天文密奏が求められた。

この陰陽道の基となった陰陽五行説とは、前述の陰陽説と五行説の合わさったものである。陰陽五行思想における呪術のひとつとして、『山槐記』（治承3年6月22日の条）には、陰陽寮の鐘の十二神が、子神は南に午神は北に向けて掛けられているのは、水神と火神を相対させる厭術である」と述べている。これは、当時火事の多かった都において「火」と「水」の調和をとり、火災を防ごうとしている呪術のひとつと思われる。さらに平安後期においては、平安中期に中心的存在であった陰陽師安倍晴明の子孫である安倍泰親が活躍した時代である。『平家物語』では「天文は根本を究めつくし、占いによる推定は掌を指し示すように正確である。ひとつも違わなかったので、さすの神子と呼んでいた。」と、泰親の占いを絶賛している¹¹⁾。また泰親は清盛の福原遷都に関して、「禁忌すべし、ただし清盛が邸を造営し、のち他へ移ったあと、皇居に転用される形をとればよい。」と占っており¹²⁾、現に遷都時には、安徳天皇の住まいとなる内裏（皇居）はまだ建造されておらず、内裏が完成するまでの約5ヶ月間、天皇は清盛邸内を仮の皇居としていた（『玉葉』治承4年6月6日の条）。このことから泰親と清盛の間には、なんらかの繋がりがあったことが推測できる。

3. 三合とは

中国の道教思想からなる文献『淮南子』「天文訓」には、「木気の三合－木は亥に生じ、卯に壮んに、未に死す。三辰は皆木なり」、「火気の三合－火は寅に生じ、午に壮んに、戌に死す。三辰は皆火なり」、「土気の三合－土は午に生じ、戌に壮んに、寅に死す。三辰は皆土なり」、「金気の三合－金は巳に生じ、酉に壮んに、丑に死す。三辰は皆金なり」、「水気の三合－水は申に生じ、子に壮んに、辰に死す。三辰は皆水なり」¹³⁾と書かれている。『淮南子』は、奈良時代前後に日本に導入されたものと考えられている。また、『淮南子』巻三天文訓、巻七精神訓には「一生二、二生三、三生萬物」とあり、要するに3つの気が合することにより、1つの強固な気となり、そこから万物が生じるとしている。

しかし、その後の史料においては三合の解釈は管見の限りでは見られず、現代に入ると気学の文献

11) 『平家物語（1）』「卷第三 法印問答」訳 市古貞次（1973）小学館

「天文は淵源をきはめ、推条掌をさすが如し。一事もたがはざりければ、さすの神子とぞ申しける。」

12) 『玉葉 第二』「卷三十五 治承四年八月」（1906）國書刊行会版

「并兩大外記大夫史等、内々尋問此事、先方角事問泰親泰親申云、先日議定之時不參会、難不承子細、於犯土作事者、尤可被忌、勿論事也、但為禪門之沙汰、被造可然之舍屋、彼人移徙之後、被借召、被用皇居可宣、公家之沙汰一切不可然者」

13) 『淮南子 上』（1979）楠山春樹訳

「木生于亥、壯于卯、死于未。三辰皆木也」

「火生于寅、壯于午、死于戌。三辰皆火也」

「土生于午、壯于戌、死于寅。三辰皆土也」

「金生于巳、壯于酉、死于丑。三辰皆金也」

に顔を見せる。

現代の文献では、「三合とは、3つの十二支が結合して、一色の力強い星になる法則をいう。たとえば地支を数えて5つめにあたる三支が結合することをいう。子（1）から数えて辰（5）、辰（1）から数えて申（5）、申（1）から数えて子（5）という関係であり、これを申子辰の三合水局、あるいは子の三合水局と呼んで好相性とし、方位では、たとえば辰年には申や子の方位は吉方であるとし、これに九星の吉方が重なった場合には「大吉方」などと判断する」（平木場、1998）¹⁴⁾、「三合会局とは三つの地支が集合した場合のことで、相生と相尅から成っている」（陳 晃華、1994）¹⁵⁾。そして「森羅万象はすべて始（生）って壮（旺）になり、終（墓）る。そうして再び始まる。始まらねば壮にならず、壮になることなくして終わりはなく、終わらずしては始まらない。生・旺・墓（庫）が具備しなければ、万物は生々流転、輪廻転生を行えない。この生・旺・墓を、森羅万象の輪廻の基底にみるのが、陰陽五行における「三合の哲理」である。」（吉野、1978）などがある。なお、輪廻転生とは仏教用語であり、中国における道教思想にはないとされているが、道教思想が日本に導入され、輪廻転生を唱える仏教と結びついたと考えられる。

『淮南子』には火気の三合、木気の三合、水気の三合、金気の三合そして土気の三合と5つ記されているが、現代の三合には土気は含まれておらず4つの三合がある。

表2

局名	火局	木局	水局	金局
地支	寅 午 戌	亥 卯 未	申 子 辰	巳 酉 丑
序数 ¹³⁾	7 + 5 + 9	6 + 4 + 8	7 + 5 + 9	6 + 4 + 8
陰陽	陽 21	陰 18	陽 21	陰 18
季節	立 夏 秋 春 至 陽土	立 春 夏 冬 分 陰土	立 冬 春 秋 至 陽土	立 秋 冬 夏 分 陰土
気	生 旺 庫	生 旺 庫	生 旺 庫	生 旺 庫

（陳 晃華、1994）

前述したように、1年の構造を十二支で見るとき、同じ北方位に位置する亥・子・丑の三支は冬で水気、東方位に位置する寅・卯・辰の三支は春で木気、南方位に位置する巳・午・未の三支は夏で火気、西方位に位置する申・酉・戌の三支は秋で金気に属する。このように、同じ方位に位置している

14) 『暦と運命学の辞典』 平木場泰義（1998）東京堂出版

15) 序数の出し方

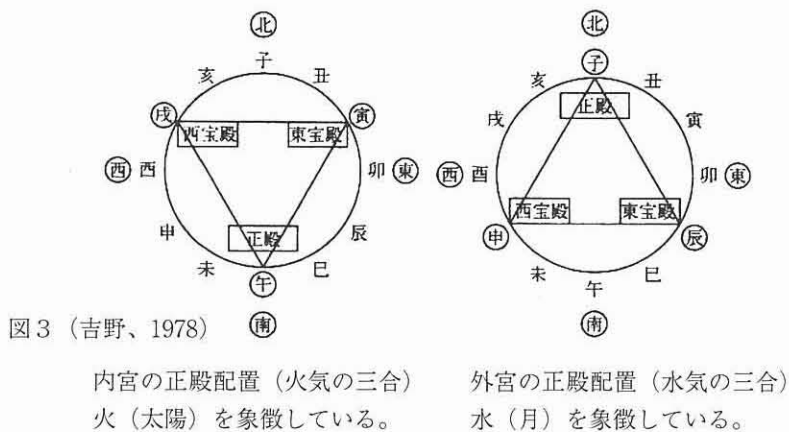
序数は駅馬に由来しており、その言葉は昔の通信は殆ど馬を利用していたことから生まれた。通信を伝達する場所や、休憩所を表す。

寅・午・戌の駅馬は申で、申より逆行して寅まで数えると7となり、寅より順行で午まで数えると5を得る。戌は、午より逆行で数えることになり、その数は9となる。要するに、申は馬であり、申から出発して通過した寅・午・戌は休憩所となり、それを駅と呼ぶ。

木局の駅馬は巳、水局は、寅、金局は、亥である。（陳 晃華、1994）

三支を一組とし強化されることを方合という。しかし、これが三合という3つの方位で構成されると、気に変化がおこる。酉の三合で見てみれば、本来、水気に属している丑も、火気に属している巳も金気へと変化する。このように、3つの特定の支が結合すれば、その中の最も強い壮んな（旺盛）時期の気へと変化するのである。

さらに三合について吉野（1978）は、伊勢神宮の正殿配置が、内宮は「寅・午・戌」の火（午）の三合で構成されており、外宮は「申・子・辰」の水（子）の三合で構成されていることを指摘している。内宮に祀られている天照大神は、太陽（日）の神＝火であるため火を象徴とする配置がなされており、また外宮に祀られている豊受大神は農耕、食物の神であるため、農耕において最も重要とされる水を象徴とする配置がなされているとしている（図3）。



Ⅲ 雪御所周辺の地形と三合

1. 風水吉相の地 雪御所町

前述したように、吉地を選定するには、気の吹き出る口を探すための定穴法を行う。二十数種あるといわれている「定穴法」の中で、神戸市兵庫区にある雪御所町を取り巻くこの地形は、「分水・合水定穴法」と思われる（図4）。「分水・合水定穴法」とは、「八の字の形に水が分かれ、下流で再び合水するところが陰陽の度数が変わるところであるため、生気が集中し真穴が融結する場所である。この時、分水するのみで、下流の合水がない場合は陰陽の度数が変わることができず、局を成すこともできない。また上流部に分水がなくても、青龍と白虎から流れる水が左右から囲みながら合水する場合は可とされる」（崔、1997）とある。この「分水・合水定穴法」では、北方に山がありそこから流れ出る川が分岐し、下流で交わり南流する。このような地形に囲まれた土地に住居を構えると良い気が得られ、吉とな

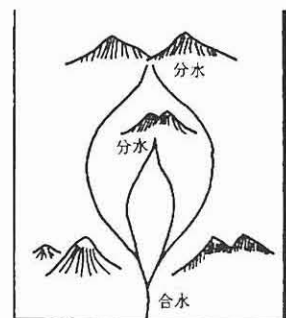


図4「分水・合水定穴法」
（崔、1997）

るという。

神戸市兵庫区雪御所町は、その地名から清盛の邸宅である雪見の御所と推定されている。北東には玄武となる六甲山系、北西には丹生山系が連なり、北東―南西方向に会下山断層が走る断層角盆地内に形成された扇状地の上に広がっている。逆三角形をした雪御所町の標高は22～28mである。西には白虎となる丸山、東には青龍となる諏訪山と大倉山に囲まれ、さらに龍脈となる天王谷川と石井川が雪御所町を取り囲むようにして湊川で合流し、朱雀とみなされる兵庫港に流れている。

雪御所町は、「分水・合水定穴法」において、龍脈となる天王谷川と石井川が流れ、合流する地点にできるとされる「穴」の位置にあたっている。すなわち、風水でいう「気」の集まる地点に置かれた可能性がある。このような地形配置は、当時、絶好の風水吉相の地と考えられていたと思われる。

2. 雪御所と神社の三合

三合の思想が『淮南子』により平安時代にはすでに導入されていることは判るものの、当時の史料に三合を応用して邸づくりをしたような事例を見いだせるものが管見の限りでは何もない。よって、現在の神社の配置構造により考察するものである。

兵庫区周辺には、清盛が都の守護・鎮護のために勧請したとされる神社が数多く残っている。その中で清盛邸の特定にきわめて有用と思われる3つの神社が存在する。それは夢野八幡神社、祇園神社、荒田八幡神社の3社である。1945年の神戸大空襲により殆どの文献は失われ、これら3神社に関しても、平安時代の史料は残されていないが、『兵庫縣神社誌上巻』『西摂大観』『神戸の神社』¹⁶⁾から、その伝承されている由緒と、雪御所との位置関係について以下に記すことにする。

① 酉（西）方位―夢野八幡神社¹⁷⁾

雪御所を中心にして、酉（西）方位に置かれているのは、夢野八幡神社である。他の八幡社同様、祭神は應神天皇である。

夢野八幡神社の神使いとされる動物は鳩であり、神社紋も鳩（向かい鳩）である。酉とは鶏に限定されず、一般的に鳥を指す。いわゆる鳩＝鳥＝酉である。『西摂大観上巻』や『兵庫縣神社誌上巻』には、1180（治承4）年の創建とされているが、それ以前からあったという伝承も残されている。また夢野町周辺は、清盛の弟である教盛邸のあったところと推定されている¹⁸⁾。

16) 『兵庫縣神社誌 上巻』兵庫縣神職會編（1984）臨川書店
『西摂大観 上巻』『西摂大観 下巻』仲彦三郎（1910）中外書房
『神戸の神社』兵庫縣神社庁神戸支部（2000）神戸新聞総合出版センター

17) 夢野八幡神社

「平清盛の福原新都造営にさきがけ、新都の守護神として治承元年（1177）に創祀されたと伝えられる」（兵庫縣神社庁神戸支部、2000）

「夢野村字尼ヶ谷に在り、應神天皇を祭る、而して當社は安徳天皇の治承4年福原遷都の砌、木村宇山平といふ處に之を祀れりと傳ふ」『西摂大観 上巻』

18) 「…夢野なる平宰相教盛の家に座まし…」『西摂大観 上巻』

② 丑（東北）方位—祇園神社¹⁹⁾

次に、雪御所町の丑（北東）方位には祇園神社が置かれている。祇園神社の祭神は須佐之男命であり、神仏習合から牛頭天王を祀っている。牛頭天王を祀っていることから、神職は祭りの期間中（7月13日～20日）の8日間は牛肉を食べないこととしているという。いわゆる牛＝丑であり、雪御所の丑方位には牛を祀る祇園神社が配置されている。

また、神仏習合であった当時は祇園神社の裏山に潮音山上伽寺という寺があり、そこに牛頭天王が祀られていたという伝承も残されている²⁰⁾。発掘調査により貴族の邸跡とみられる遺跡が発見されているが、誰の邸があったかは判っていない。

③ 巳（東南）方位—荒田八幡神社²¹⁾

さらに、雪御所町の巳（東南）方位には荒田八幡神社が置かれている。この荒田八幡神社の置かれた土地は、清盛の弟である頼盛邸のあったところとされている。由緒によると、旧高田神社とされ、清盛は熊野信仰が厚かったことから、熊野権現を祀ったとされる。現在は隣地にあった八幡神と合祀し、荒田八幡神社となったが、熊野権現の神紋は巴紋であり、荒田八幡神社も、神紋・神社紋ともに巴（三つ巴）を使用している。この巴は、水が渦を巻いている形であるとか、勾玉を表しているとか、弓を引く時に使う轆の模様であるとか、色々な説があるが、『巴』という字は虫（爬虫類）の象形字であり、古代中国では大蛇を意味する。（加藤常賢、1970）²²⁾とあるように、蛇を表す。いわゆる巴＝蛇＝巳である。また、丹羽（1984）²³⁾は、巴紋について、「水火の根源は…天地の自然現象を司る神にはかならないから、神をあらわすシルシとしたのだろう」と説いている。

これらの3つの神社を結び合わせたその中心点には、雪御所町が位置する。これは西（西）を中

19) 祇園神社

「貞観11年（869）姫路の広峰神社に祀られている素戔鳴尊の御分霊の神輿が姫路から京都に向けて行く中、平野に住む広峰神社と縁のある徳城坊阿闍梨の案内で一泊され、地元の人々がご神徳有るのを感謝し、素戔鳴尊を祀ったのが、祇園神社の始まりとされている。」（兵庫県神社庁神戸支部、2000）

「奥平野村字宮山に在り素戔鳴尊を祀る」『兵庫縣神社誌 上巻』

20) 祇園神社の南東に位置する東福寺の由緒によると、清盛は七堂伽藍を完備した上伽寺を祇園神社の裏山に築き、そこに牛頭天王を祀っていた。上伽寺では、清盛が海潮の響き聞きながら経が島の築造計画を練ったことから、潮音山という山号が清盛によって付けられ、潮音山上伽寺となった。潮音山上伽寺は今はなく東南50Mにある東福寺が継承したとされている。

21) 荒田八幡神社

「旧荒田村字一町田に鎮座し、熊野権現を祀っていたことから、その森を権現の森といっていた。…『厳島御幸記』に記されているように、池の大納言平頼盛の山荘であった」『神戸の神社』

（荒田村に關しての記述）

「傳へいふ昔は此地一帯夢野の内たりしに、何つの頃か大雨ありて水門川（湊川）洪水出で、爲めに田畑荒れしより、荒田の名起れりりと、而して治承四年六月二日福原遷都に就き、安徳天皇を平相國の弟、池大納言頼盛の山荘に奉し、之を假の皇居と定めしは、當村高田神社の所を其中央とし、境域廣く亘れるが如し数十年前此付近を發掘せしに、甲冑の腐朽せるもの数多出でしといふ」『西摂大観 下巻』

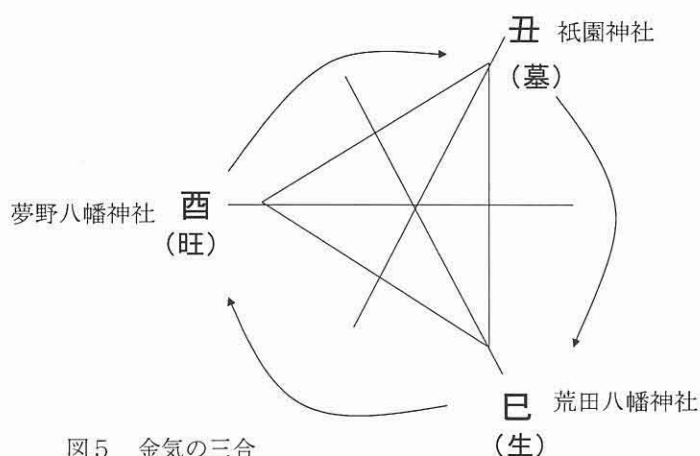
22) 『漢字の起源』加藤常賢（1970）角川書店

23) 丹羽基二（1974）『神紋』秋田書店

心とした「金気の三合」であり、その三角形で取り囲まれた範囲は金気一色となることから、「三辰は皆金也」とあるように、三角形で囲まれた部分は「金の気」一色となる。金気三合の法則によれば、十二支の「巳」は金気の始まりで、その生じるところである。金気は財宝の象徴であり、「巳」はすなわち「蛇」である。蛇は財宝の象徴とみることができる（図5）

清盛は、自らの繁栄と、平家一門の繁栄を願うために、自らの邸配置に金気の三合を構成したものと考える。

以上のように、雪御所とそれを取り巻く3つの神社の位置関係からみて、雪見の御所は、清盛が常駐していたとみられる清盛本邸ではないかと考える。そして、その本邸は、気が集中する中心に位置している。



IV おわりに

平清盛は1167（仁安2）年に太政大臣を辞任の後、1168（仁安3）年に出家し福原への別邸生活へ入った。

福原遷都の12年前である。福原北部の地は「平野の勝地」と呼ばれ、その頃には清盛以外の上流平家貴族の屋敷も造られたものとみられている。ゆえに、現在の平野という地名は平家（平）の地（野）という意味で名付けられたとされている。

『平家物語』には、清盛が福原の所々に、春には花見の岡の御所、秋には月見の濱の御所、泉殿、松陰殿、馬場殿、二階の棧敷殿、雪見の御所、萱の御所などの邸宅を置き、季節による邸配置がしてあったと思われる。その中で、清盛の常駐する本邸宅があったと考える。清盛邸の位置については、神戸市兵庫区雪御所町付近だといわれてきた。現在の雪御所町は『平家物語』における雪見の御所であるとされ、湊山小学校前には、雪御所遺跡と書かれた石碑が置かれている。

福原の地は、北の六甲山系と丹生山系、南に断層角盆地が広がる。この盆地を囲むように東の諏訪山丘陵（青龍）、西の丸山丘陵（白虎）が張り出し、中央を天王谷川と石井川が流れ、南に朱雀とみ

なされる兵庫港、大阪湾が配置する風水吉相の地であった。現在の雪御所町にあったとされる清盛邸は、風水における土地選定法の「分水・合水定穴法」に適う地であった。しかし、先行研究や発掘調査の結果から雪御所町付近に平安時代の貴族の邸跡があることが確認されているが、清盛邸と断定できる根拠はなかった。そこで本稿は、当時の都の造営に多大な影響を与えたと思われる風水思想において清盛本邸の位置を特定しようとした。平安時代は風水思想のなかでも呪術的要素の強い陰陽五行思想が「陰陽道」として取り込まれた時代であり、人々の行動様式もその思想に左右された時代であった。清盛本邸に関しても何らかの風水的呪術が施されていると考え、その思想に基づき清盛が勧請したとされる神社の配置の謎を解くことによって清盛本邸を考察した。その結果、熊野権現（現 荒田八幡神社）、夢野八幡神社、牛頭天王（現 祇園神社）は、金気の三合を形成し、その三角形の中心に雪御所と推定される邸跡が存在することが判った。金気三合は財宝の象徴であり、三角形に囲まれた地域は金気が最も強くなる場所である。また、荒田八幡神社のある荒田町周辺は清盛の弟である頼盛邸、夢野八幡神社のある夢野町周辺は、同じく弟である教盛邸のあったところと推定されている。祇園神社周辺の邸宅主は不明だが、発掘調査から、貴族邸があったと推定されている。雪御所町は風水思想に叶う吉地であり、三角形を構成するこれら3神社は、清盛にとって最も身近に感じる人物の邸内に置かれている。平家一門の邸内に崇敬する神を勧請し、三合という呪術によって、中心となる人物（清盛）の邸（雪見の御所）を守護することにより西国を中心に海を拠点として活躍してきた平家一門の繁栄を願ったと思われる。現に800年以上経った今でも、これら3神社は、宮司ならびに氏子の方々に見守られながらしっかりと生き続けている。

付記

現地調査において、祇園神社・熊野神社・夢野八幡神社の宮司、氏子の方々にご協力いただいた。皆様には、深く感謝申し上げます。